

科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書

平成 24 年 5 月 26 日現在

機関番号 : 14501

研究種目 : 若手研究 (B)

研究期間 : 2010~2011

課題番号 : 22792265

研究課題名(和文) 精神障害者の訪問中に訪問看護師が受ける暴力の実態に関する研究

研究課題名(英文) Study of the violence that home visiting nurse received during the visit of people with mental disorders.

研究代表者

藤本 浩一(FUJIMOTO HIROKAZU)

神戸大学・大学院保健学研究科・助教

研究者番号 : 20467666

研究成果の概要(和文) :

精神障害者への訪問看護において、訪問看護師が受ける暴力の実態を明らかにした。近畿圏の精神科訪問看護師 226 名に調査票を送り、回収した 94 部を分析した。調査時点までに何らかの暴力を受けた経験がある精神科訪問看護師は 49 名(52.1%)、この 1 年間では 37 名(39.4%)であった。また近畿圏の一般訪問看護師 648 名に調査票を送り、回収した 176 部を分析した。調査時点までに精神科の利用者から何らかの暴力を受けた経験がある一般訪問看護師は 82 名(46.5%)、この 1 年間では 66 名(37.5%)であった。

研究成果の概要(英文) :

We investigated the violence that visiting nurse experienced during the visit of people with mental disorders. We mailed a questionnaire to 226 psychiatric home visiting nurses in Kinki area, and we analyzed 94 respondents. By the point of investigation, 49 (52.1%) psychiatric home visiting nurses experienced some kind of violence. For this one year, 37 (39.4%) psychiatric home visiting nurses experienced. And we mailed a questionnaire to 648 general visiting nurses that also visit people with mental disorders in Kinki area, and we analyzed 176 respondents. By the point of investigation, 82 (46.5%) general visiting nurses experienced some kind of violence during the visit of people with mental disorders. For this one year, 66 (37.5%) general visiting nurses experienced.

交付決定額

(金額単位 : 円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	300,000	90,000	390,000
2011 年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
年度			
総計	400,000	120,000	520,000

研究分野 : 精神看護学

科研費の分科・細目 : 看護学・地域・老年看護学

キーワード : 精神障害、訪問看護、暴力

1. 研究開始当初の背景

近年、患者の権利意識の高まり、頻発する医療事故、報道に影響される潜在的医療不信、医療費の自己負担の増加などが影響し、医療関係者が患者から受ける暴力は増加の一途を辿る(坂口,2005)。

英国の調査(British Home Office,2004)では、全職種暴力被害率1.7%に比べ、「看護師、社会福祉関連専門職」の暴力被害率は5.6%であり、「警察官、消防士、刑務所職員」の15.6%に続く、第2位に位置する。

我が国においても看護師が受ける暴力の調査報告は増加しており、2003年日本看護協会「保健医療分野における職場の暴力に関する実態調査」は、内科系病棟・精神科病棟の看護師の半数が身体的暴力を受けた経験があると報告した。また身体的暴力を受けた経験は高齢者施設が最も高く、言語的暴力を受けた経験は保健所・保健センターが最も高い特性があり、保健医療福祉の現場全てを暴力が発生する場所と捉える必要がある。

職場における暴力がもたらす看護師への影響として、ICNは①質の高いケアの提供を妨げる、②(看護師の)個人的尊厳と自尊心を危うくする、とした。谷本(谷本,2006)は患者から暴力を受けることは、看護師にとって人格の否定、安全への脅威、信頼関係の破綻といった否定的感情をもたらす衝撃的な出来事であり、自己の存在が揺るがされる体験と指摘し、小路(小路,2006)は使命感をもって医療を志した者の熱意を失わせ、ひいては退職にいたる事態まで招くことを指摘した。

看護師への暴力に対し、国際看護協会(International Council of Nurses : ICN)は、1994年「職場での暴力に対処するためのガイドライン」、1999年「職場における暴力対策ガイドライン」を作成し、2000年に暴力に関する所信表明を全面改訂した。

これを受けて日本看護協会は「職場における暴力対策ガイドライン」を翻訳・発表し、2001年「病院における夜間保安体制ならびに外来等夜間看護体制、関係職種の夜間対応体制に関する調査」、2003年「保健医療分野における職場の暴力に関する実態調査」を実施した。その成果をもとに2004年「看護の職場における労働安全衛生ガイドライン」、2006年「保健医療福祉における暴力対策指針 - 看護師のために -」²⁾を作成した。

一方で2000年ごろより、CPI(Crisis prevention institute)の非暴力的危機介入方法や専門的暴力対応トレーニング(PART : Professional Assault Response Training)、包括的暴力防止プログラム(Comprehensive Violence Prevention and Protection Programme : CVPPP)など、欧米の暴力対策プログラムが紹介・実施されつつある。

しかしこれら暴力対策ガイドラインやプ

ログラムは、現場に十分即しているとは考えにくく、より実践的な暴力予防策、暴力対策を構築・実施するためには、暴力被害の実態を把握し、業務の特性や職場風土を踏まえた問題点の明確化と、施設や地域の資源を活用した対策を検討する必要がある。

これまで看護師への暴力に関する先行研究の殆どが病院対象であった。訪問看護師への暴力は、2003年「保健医療分野における職場の暴力に関する実態調査」で調査されたが標本数は少なく、十分に検討されたとはいえない。つまり訪問看護師への暴力の実態は未だ明らかになっていない。

特に我が国の精神医療保健福祉の動向は、2004年「精神保健医療福祉の改革ビジョン」に基づいて、入院医療中心から地域生活中心への改革を推進しており、訪問看護師が地域生活する精神障害者を支援する機会が増加している。精神障害者への訪問看護における具体的な困難状況として、精神障害者による暴力、セクハラ行為(船越,2006)があり、精神科訪問看護師の5割以上が精神障害者による暴力・セクハラにジレンマを抱き、暴力を深刻な問題と捉え、対策が十分ではないこと(伊関ら,2005)を指摘されている。

これらの研究報告より、地域生活する精神障害者への訪問看護において、訪問看護師が受ける暴力の存在が示唆されるものの、その暴力の実態は明らかではない。そこで本研究は、訪問看護師が受ける暴力の実態について明らかにし、業務特性や職場風土を踏まえた問題点の明確化と、施設や地域資源を最大限に活用した対策を検討し、安全に働くことができる職場環境の構築と質の高い医療サービスの提供につなげていくための基礎資料の作成を目的とする。

2. 研究の目的

- (1)近畿圏の①精神科訪問看護師ならびに②一般訪問看護師を研究対象として、精神科の利用者への訪問看護において、これまでに暴力を受けた経験の有無、この1年間で暴力を受けた経験の有無と頻度を明らかにすることを目的とした。
- (2)精神科訪問看護師を研究対象として、暴力を受けた精神科訪問看護師に生じる心的影響、を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1)研究対象

近畿圏(京都、大阪、滋賀、奈良、和歌山、兵庫)の①精神科訪問看護ステーションに所属する精神科訪問看護師、②一般訪問看護ステーションのうち、精神科の利用者への訪問を実施するステーションに所属する訪問看護師、を研究対象とした。

(2)対象の抽出方法

①精神科訪問看護師：日本精神科病院協会ホームページ(<http://www.nisseikyo.or.jp/>)の会員病院紹介の検索ページから、近畿圏の精神科病院リストを作り、精神科訪問看護の実施について電話で確認した。精神科訪問看護を実施していた場合、精神科訪問看護ステーションの代表者に研究趣旨を説明し、調査票の送付について諾否を確認した。応諾を得た場合、その精神科訪問看護ステーションに所属する精神科訪問看護師を研究対象とした。

②一般訪問看護師：日本訪問看護事業協会ホームページ(<http://www.zenhokan.or.jp/>)より、近畿圏の訪問看護ステーションリストを作成した。各訪問看護ステーションに電話をかけ、精神科の利用者への訪問看護の実施状況と研究への参加協力の諾否を確認した。精神科の利用者への訪問看護を実施しており、研究への参加協力を応諾したステーションに所属する訪問看護師を研究対象とした。

(3)調査票の作成方法

先行研究を参考として、研究者が調査票(案)を作成した。その調査表(案)を用いて、精神科訪問看護師3名にプレテストを行い、その結果から調査票の質問内容や構成、回答方法、倫理的配慮について修正作業を経たものを調査票とした。

(4)調査票の内容

調査票の質問内容は①年齢、性別などの基本的属性、②これまでの訪問中に暴力を受けた経験の有無、③この1年間で訪問中に暴力を受けた経験の有無、④この1年間で訪問中に暴力を受けた頻度、とした。

加えて精神科訪問看護師に対して、⑤最も印象に残っている暴力の種別と発生してから経過期間、具体的内容、その暴力の心的影響について IES-R(Impact of Event Scale-Revised)の記入を求めた。

(5)データ収集方法

訪問看護ステーションの代表者に研究の説明文書、調査票、返信用封筒を郵送し、所属する精神科訪問看護師への配布を依頼した。研究の説明文書にて研究への参加協力を求め、回答した調査票は返信用封筒にて個別返送とした。

(6)データ分析

対象者の基本的属性および暴力を受けた経験について把握するため、記述統計量を求めた。次に各暴力を受けた経験を有する群/経験がない群の基本的属性について t 検定もしくは χ^2 乗検定を実施した。次に IES-R 得点と発生してからの経過期間の関連、対象者の平均年齢よりも高年齢群/低年齢群、看護師としての平均総経験期間よりも長い経験期間群/短い経験期間群、訪問看護師としての平均経験期間よりも長い経験期間群/短い経験期間群、精神科の利用者への平均経験期間よりも長い経験期間群/短い経験期間

群の間で IES-R 得点を比較した。さらに最も印象的な暴力が単一種の暴力であった群/複数種の暴力であった群の間で IES-R 得点を比較した。全ての検定における p 値は両側であり、 $p < 0.05$ を有意とした。統計解析には SPSS ver.19.0 for windows を用いた。

4. 研究成果

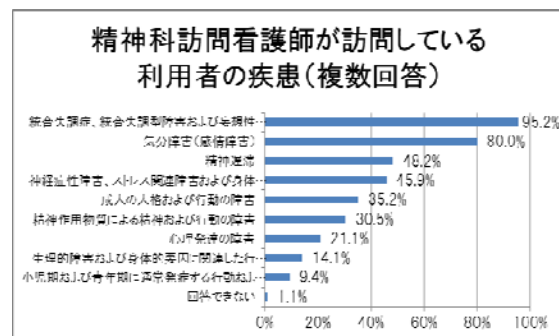
(1)調査票の配布と回収の状況

近畿圏の①精神科訪問看護ステーション計 63 施設に 226 部の調査票を郵送し、回収された調査票は 98 部(回収率:43.3%)、有効回答は 94 部(有効回答率:95.9%)であった。②一般訪問看護ステーション計 219 施設に 648 部の調査票を郵送し、回収された調査票は 186 部(回答率:28.7%)、有効回答は 176 部(有効回答率:94.6%)であった。

(2)回答者の基本的属性

回答者の基本的属性について①精神科訪問看護師の性別は男性 21 名(22.3%)、女性 73 名(77.7%)、平均年齢は 46.1 歳(± 9.1)であった。免許の種別は看護師 81 名(86.2%)、准看護師 13 名(13.8%)、雇用形態は常勤 86 名(91.5%)、非常勤・パートタイム 5 名(5.3%)であった。看護師としての総経験期間は平均 19.6 年(235.9 ヶ月 ± 103.1)、訪問看護の経験期間は平均 4.9 年(59.5 ヶ月 ± 51.1)、精神科訪問看護の経験期間は平均 4.8 年(58.3 ヶ月 ± 54.5)であった。精神科訪問看護以外の精神保健医療福祉領域における勤務経験は 77 名(81.9%)が「経験あり」で、その経験期間は平均 12.6 年(152.2 ヶ月 ± 102.9)であった。

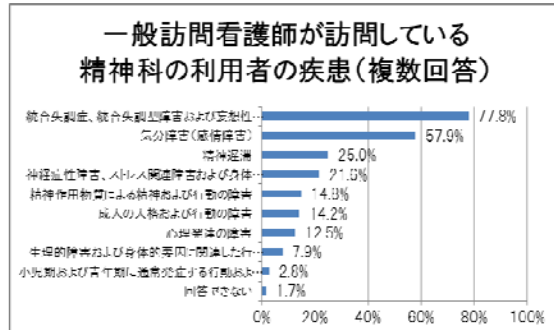
調査時点で精神科訪問看護師が訪問している利用者の主疾患は統合失調症(95.2%)が最も多く、ついで気分障害(80.0%)、精神遅滞(48.2%)であった。



②一般訪問看護師の性別は男性 7 名(3.9%)、女性 169 名(96.1%)、平均年齢は 45.1 歳(± 7.3)であった。免許の種別は看護師 168 名(95.4%)、准看護師 8 名(4.6%)、雇用形態は常勤 138 名(78.4%)、非常勤・パートタイム 36 名(20.5%)であった。看護師としての総経験期間は平均 19.5 年(233.5 ヶ月 ± 98.1)、訪問看護の経験期間は平均 6.9 年(82.7 ヶ月 ± 52.6)、精神科の利用者への訪問看護の経験期間は平均 4.2 年(49.8 ヶ月 ± 41.4)であった。訪問看護以外での

精神保健医療福祉領域における勤務経験は37名(21.0%)が「経験あり」で、その経験期間は平均6.5年(78.2ヵ月±91.5)であった。

調査時点で一般訪問看護師が訪問している精神科の利用者の主疾患は統合失調症(77.8%)が最も多く、ついで気分障害(57.9%)、精神遅滞(25.0%)であった。



(3)身体的暴力を受けた経験

精神科の利用者への訪問看護において、調査時点までに身体的暴力を受けた経験を有する精神科訪問看護師は18名(19.1%)、一般訪問看護師は41名(23.2%)であった。

この1年間の精神科の利用者への訪問看護において、身体的暴力を受けた経験を有する精神科訪問看護師は3名(3.2%)、一般訪問看護師は29名(16.4%)であった。

この1年間に身体的暴力を受けた回数は、精神科訪問看護師は1回以上3回未満が3名、一般訪問看護師は1回以上3回未満が19名、3回以上5回未満が2名、5回以上10回未満が5名、10回以上が3名であった。

この1年間で身体的暴力を受けた経験を有する群/経験がない群の間で①精神科訪問看護師の基本的属性を比較したところ、有意差を認める項目はなかった。②一般訪問看護師の基本的属性を比較したところ、有意差を認める項目はなかった。

(4)言語的暴力を受けた経験

精神科の利用者への訪問看護において、調査時点までに言語的暴力を受けた経験を有する精神科訪問看護師は37名(39.4%)、一般訪問看護師は51名(28.9%)であった。

この1年間の精神科の利用者への訪問看護において、言語的暴力を受けた経験を有する精神科訪問看護師は26名(27.7%)、一般訪問看護師は39名(22.1%)であった。

この1年間に言語的暴力を受けた回数は、精神科訪問看護師は1回以上3回未満が16名、3回以上5回未満が4名、5回以上10回未満が3名、10回以上が3名であった。一般訪問看護師は1回以上3回未満が16名、3回以上5回未満が8名、5回以上10回未満が5名、10回以上が10名であった。

この1年間で言語的暴力を受けた経験を有する群/経験がない群の間で①精神科訪問看護師の基本的属性を比較したところ、訪問

看護総経験期間(p=0.01)と精神科訪問看護経験期間(p=0.001)に有意差を認めた。②一般訪問看護師の基本的属性を比較したところ、精神科訪問看護経験期間(p=0.006)に有意差を認めた。

(5)性的暴力を受けた経験

精神科の利用者への訪問看護において、調査時点までに性的暴力を受けた経験を有する精神科訪問看護師は10名(10.6%)、一般訪問看護師は23名(13.1%)であった。

この1年間の精神科訪問看護において、性的暴力を受けた経験を有する精神科訪問看護師は10名(10.6%)、一般訪問看護師は15名(8.5%)であった。

この1年間に性的暴力を受けた回数は、精神科訪問看護師は1回以上3回未満が7名、5回以上10回未満が3名であった。一般訪問看護師は1回以上3回未満が9名、3回以上5回未満が2名、5回以上10回未満が2名、10回以上が2名であった。

この1年間で性的暴力を受けた経験を有する群/経験がない群の間で①精神科訪問看護師の基本的属性を比較したところ、看護師総経験期間(p=0.048)に有意差を認めた。②一般訪問看護師の基本的属性を比較したところ、有意差を認める項目はなかった。

(6)脅迫・威嚇行為を受けた経験

精神科の利用者への訪問看護において、調査時点までに脅迫・威嚇行為を受けた経験を有する精神科訪問看護師は19名(20.2%)、一般訪問看護師は26名(14.7%)であった。

この1年間の精神科訪問看護において、脅迫・威嚇行為を受けた経験を有する精神科訪問看護師は13名(13.8%)、一般訪問看護師は16名(9.1%)であった。

この1年間に脅迫・威嚇行為を受けた回数は、精神科訪問看護師は1回以上3回未満が11名、5回以上10回未満が2名であった。一般訪問看護師は1回以上3回未満が9名、3回以上5回未満が4名、5回以上10回未満が1名、10回以上が2名であった。

この1年間で脅迫・威嚇行為を受けた経験を有する群/経験がない群の間で①精神科訪問看護師の基本的属性を比較したところ、精神科訪問看護以外での精神保健福祉領域の勤務経験の有無(p=0.04)に有意差を認めた。②一般訪問看護師の基本的属性を比較したところ、有意差を認める項目はなかった。

(7)器物破損を目の当たりにした経験

精神科の利用者への訪問看護において、調査時点までに器物破損を目の当たりにした経験がある精神科訪問看護師は10名(10.6%)、一般訪問看護師は16名(9%)であった。

この1年間の精神科の利用者への訪問看護において、器物破損を目の当たりにした経験がある精神科訪問看護師は4名(4.3%)、一般訪問看護師は9名(5.1%)であった。

この1年間に器物破損を目の当たりにした回数は、精神科訪問看護師は1回以上3回未満が3名、5回以上10回未満が1名であった。一般訪問看護師は1回以上3回未満が6名、3回以上5回未満が2名、10回以上が1名であった。

この1年間で器物破損を目の当たりにした経験を有する群/経験がない群の間で①精神科訪問看護師の基本的属性を比較したが、有意差を認める項目はなかった。②一般訪問看護師の基本的属性を比較したところ、有意差を認める項目はなかった。

(8)何らかの暴力を受けた経験

精神科の利用者への訪問看護において、調査時点までに何らかの暴力を受けた経験を有する精神科訪問看護師は49名(52.1%)、一般訪問看護師は82名(46.5%)であった。

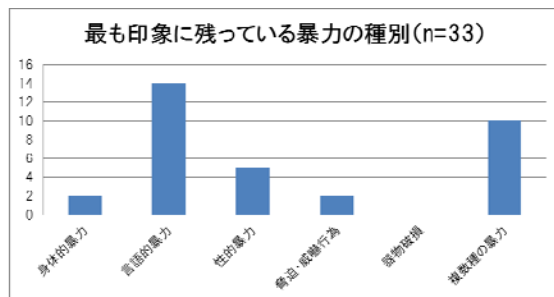
この1年間の精神科訪問看護において、何らかの暴力を受けた経験を有する精神科訪問看護師は37名(39.4%)、一般訪問看護師は66名(37.5%)であった。

この1年間で何らかの暴力を受けた経験を有する群/経験がない群の間で①精神科訪問看護師の基本的属性を比較したところ、訪問看護総経験期間(p=0.047)、精神科訪問看護総経験期間(p=0.014)で有意差を認めた。②一般訪問看護師の基本的属性を比較したところ、精神科の利用者への訪問看護の経験期間(p=0.015)で有意差を認めた。

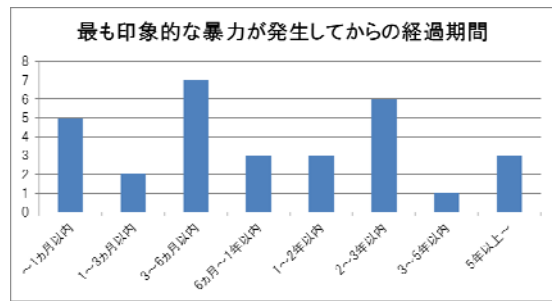
(9)最も印象に残っている暴力

精神科訪問看護師に対し、最も印象に残っている暴力について、その種別と発生してから経過期間、具体的内容、その暴力に関して調査票記入日における最近1週間の状態についてIES-Rの記入を求めたところ、33名から回答を得た。

最も印象に残っている暴力の種別として、身体的暴力2名、言語的暴力14名、性的暴力5名、脅迫・威嚇行為2名、器物破損0名、同時に複数種の暴力が10名であった。

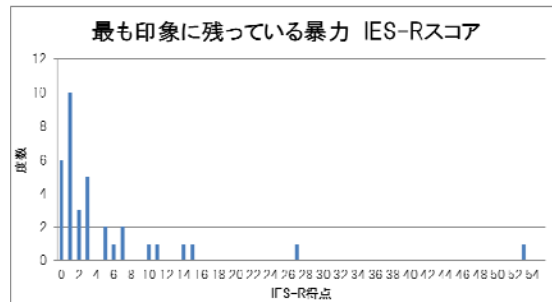


最も印象に残っている暴力が発生してから経過期間は、平均27.7ヵ月(±43.797)であった。

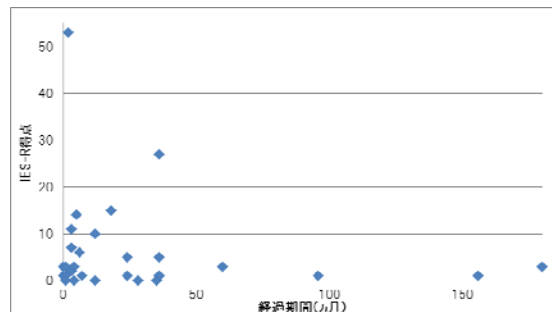


最も印象に残っている暴力の具体的内容として、「看護師失格と怒鳴られた」「目の前で暴れ、蹴られた」「訪問中に胸、足、腕、顔などに触わってくる」「殴りかかってくる」「中身の入ったペットボトルを投げつける」「タンスなどを横たおしにして暴れる」などが回答された。

最も印象に残っている暴力のIES-R得点は平均5.46点(±9.983)、最頻値1点、最小値0点、最大値53点であり、33名中2名(6.1%)がPTSDのハイリスク者であった。



最も印象に残っている暴力が発生してから経過期間とIES-R得点の関連については、Pearsonの相関係数=-0.145であった。



研究対象者の平均年齢46.1歳よりも高い年齢群/低い年齢群でIES-R得点を比較したが、有意差はみられなかった。また看護師としての総経験期間の平均235.9ヵ月よりも長い経験期間を有する群/短い経験期間を有する群、ならびに訪問看護師としての経験期間の平均59.5ヵ月よりも長い経験期間を有する群/短い経験期間を有する群、精神科訪問看護師経験期間の平均58.3ヵ月よりも長い経験期間を有する群/短い経験期間を有する群の間でIES-R得点を比較したが、有意差はみられなかった。さらに最も印象的な暴力が単一種の暴力であった群/同時に複数種の暴力であった群の間でIES-R得点を比較したが、有意差はみられなかった。

(10) 考察

本研究では暴力を身体的暴力、言語的暴力、

性的暴力だけでなく、脅迫・威嚇行為、器物破損までを含めて幅広く捉えて調査を実施した。そのため先行研究との単純な比較は難しいが、精神科訪問看護師、一般訪問看護師が精神科の利用者への訪問看護を行うなかで、1年間で約4割近い訪問看護師が何らかの暴力を受けている、という事実は注目すべき点と考えられる。

暴力の種別では、1年間に言語的暴力を受ける経験率が22.1～27.7%と高く、精神科の利用者への訪問看護において発生する暴力の特性と考えられた。また1年間における暴力の経験率において、精神科訪問看護師と一般訪問看護師の間で差がみられた暴力の種別は身体的暴力であり、その差が生じる要因については、今後更なる検討が必要である。

また暴力を受ける回数についても、複数回の暴力を受けている訪問看護師が少なくないことが注目すべき事実であり、ある特定の利用者からの暴力が繰り返される傾向の有無など、利用者側の要因の分析とその対策について検討が必要と考えられた。

暴力を受けた経験を有する群／経験がない群の基本的属性の比較したところ、いくつかの暴力において、暴力を受けた経験を有する群が看護師総経験期間や訪問看護師総経験期間、精神科の利用者への訪問看護経験期間が有意に長い経験期間である傾向がみられた。このことから暴力が発生するリスクが高い利用者には、経験の長い訪問看護師が業務にあたる、といった何らかの対策がなされていることが推測された。一方で、暴力がおこる危険性は訪問看護師の特性に起因する部分は少なく、どの訪問看護師にも暴力が起こりうるといえることから、訪問看護師が実施する普段からの暴力予防策や対策、そしてリスクが高い利用者への訪問時に実施する予防策や対策を今後明らかにすることが重要と考えられた。

暴力の心的影響については、十分な標本数が得られなかったものの、何らかの心的影響を抱えている、特にPTSDのハイリスクに該当する症状を抱えている訪問看護師の存在が明らかとなった。IES-R得点と基本的属性との関連や暴力の種別との関連は見いだせておらず、今後さらに検討を進める必要がある。また暴力を受けた訪問看護師に対するケアの在りかたについても検討する必要があると考えられた。

10)今後の展望

精神科の利用者への訪問看護において、ある一定の割合で暴力が発生する事実が明らかになったことから、暴力が発生する他の要因（利用者側の要因、環境要因など）について今後検討を進め、どのような条件が揃ったときにリスクが高まるのかを明らかにする必要がある。

また訪問看護師が暴力に対して、何らかの予防策や対策を実施していることが伺えた。このことから、より安全な訪問看護を実施する技術基盤を構築するために、その技術を明らかにしていく必要がある。

何らかの心的影響を抱えている訪問看護師の存在が明らかになった。このことから、暴力を受けた訪問看護師へのケアの実態や効果的なケアの在りかたについて検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計4件)

①出口倫子、藤本浩一：一般訪問看護師が精神科の利用者から受ける暴力の実態調査、第42回日本看護学会(精神看護)、2011年9月30日、10月1日、札幌コンベンションセンター(北海道)

②西出彰穂、藤本浩一：精神科訪問看護師が利用者の訪問中に受ける暴力の心的影響に関する調査、第42回日本看護学会(精神看護)、2011年9月30日、10月1日、札幌コンベンションセンター(北海道)

③廣田美里、藤本浩一：精神科の利用者からの暴力に対する訪問看護師および所属施設の対応、第42回日本看護学会(精神看護)、2011年9月30日、10月1日、札幌コンベンションセンター(北海道)

④藤本浩一：一般訪問看護師が訪問中に発生する暴力に対する予防策に関する研究、第42回日本看護学会(精神看護)、2011年9月30日、10月1日、札幌コンベンションセンター(北海道)

[その他]

出版社(じほう社、メディファクスダイジェスト) :

<http://mfd.jiho.jp/servlet/mfd/index.html>

)からの取材：1件

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤本浩一(FUJIMOTO HIROKAZU)

神戸大学・大学院保健学研究科・助教

研究者番号：20467666